（様式４）

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和　３年　２月１５日

グループ名	八王子市立由木中学校	フリガナ 代表者氏名	ウチノ ユウジ 内野　雄史
学校名 （代表者）	八王子市立由木中学校	電話番号	042－676－8120
研究テーマ	Flourish（フラーリッシュ）理論に基づいた教育活動の展開 ― 不登校が生じない魅力ある学校づくり ―		
研究期間	平成３１年　４月　１日　から　令和　３年　３月３１日　まで		
研究結果 の概要 ※詳細は別紙により報告	平成31年度・令和２年度八王子市教育委員会研究指定校として、不登校及び魅力ある学校づくりについて研究を行ってきた。東京学芸大学の松尾直博教授に全面的に御指導、御示唆をいただきながら取り組んだ。新型コロナウイルス感染防止のため他校の教員等には公開できなかったが、令和３年２月８日に研究発表会を行った。 研究仮説を「フラーリッシュに含まれる要素（楽しさ、熱中、絆、意義、達成、強み）を高める取組を実践することで魅力ある学校づくりが推進され、不登校も減少するであろう」とした。フラーリッシュとはポジティブ心理学の言葉で、一時の幸せではなく、満ち足りた幸せな状態が末長く続くようなイメージで使われ、最適な自己を実現している状態といった意味合いを含んでいる。 各自（管理職、特別支援教育担当、養護教諭を含む）が各学級、生徒の状況を分析し、フラーリッシュ要素を意識した教育実践に取り組んだ。実践事例は142にのぼり、事例集『百花繚乱』にまとめた。検証の指標としては、毎月の不登校生徒数、３回の生徒アンケート、２回のHyperＱＵを用いた。 不登校は、多くの学校で課題になっている。今回の研究は、不登校の危険因子を減らすことではなく、保護因子を厚くすることで不登校を新たに生じさせないという試みであった。松尾教授から御紹介いただいた「フラーリッシュ」の観点「楽しさ」「熱中」「絆」「意義」「達成」「強み」を感じられる教育活動を考え、教科の授業だけでなく特別活動や帰りの会など全教育活動で実践に取り組んでみた。 研究を通した不登校対策については、すぐに効果が表れるような研究、取組でもない。不登校への効果までは届かなかったかもしれないが、その前段階の「魅力ある学校」に向けて前進したのは間違いない。検証のしようがないが、「フラーリッシュ」の取組によって不登校にならずにすんでいる生徒が数名はいるように思う。 教職員が「楽しさ」を感じながら「熱中」して取り組める校内研究でありたいと思う。ささやかながらも「達成」が感じられるものでありたいと思う。校内研究の取組を通して教職員の「絆」がかたいものになる。校内研究の「意義」と自分の「強み」を感じた本校の教職員が、どこかで校内研究の担い手になり、よりよい学校づくりに貢献してくれると信じている。校内研究には、指導力、教師力を高め、学校を変えていく力がある。 本研究は一区切りするが、今後も魅力ある学校、フラーリッシュの感じられる学校づくりを推進していく。		
その他 特記事項	・研究成果が書籍として出版されることになるかもしれない。 ・安心して出張できる状況になれば研究発表会を独自に行いたいと考えている。		

学校が抱える課題

増え続ける不登校
（文部科学省不登校の定義による）令和２年度９月末時点

文部科学省
令和元年１０月２５日
「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」
２ 学校等の取組の充実
１．魅力あるよりよい学校づくり　児童生徒が不登校になってからの事後的な取組に先立ち，児童生徒が不登校にならない，魅力ある学校づくりを目指すことが重要であること。

国立教育政策研究所
「不登校に関する調査研究協力者会議」
最終報告（平成２８年７月）
１「不登校が生じないような学校づくり等」
（１）魅力あるよりよい学校づくり
学校における不登校への取組については、児童生徒が不登校になってからの事後的な取組に偏っているのではないかという指摘もある。児童生徒が不登校にならない、魅力ある学校づくりを目指すことが重要である。

平成３１年度・令和２年度
学校経営計画
特別支援教育の推進
①【不登校の予防と対応】
関係諸機関と連携した予防と対応への取組。

八王子市教育委員会
基本方針１
7.いじめ、不登校などの多様な課題に対応する相談・支援機能の充実を図るとともに、互いに認め合い、ともに向上することができる学校づくりを推進する。

研究主題
Flourish（フラーリッシュ）理論に基づいた教育活動の展開
―不登校が生じない魅力ある学校づくり―

仮　　説
フラーリッシュ（持続的幸福）に含まれる５つの要素（保護因子※１）を高める取組を実践することで魅力ある学校づくりが推進され、不登校も減少するであろう。

課題に迫る手だてから実現へのイメージ

保護因子の高まり
―不登校の未然防止―

共通する支援
生徒が自分の「強み」（よさ・長所）を発揮したり、伸ばしたり、自覚したり、認め合えるような機会の設定

「強み」
よさや長所の認識

調査・課題確認
学期に１回の５観点＋「強み」による調査・フィードバック・実践（PDCA×３）

自己肯定感
自己有用感

自己決定
自己選択・自己決定

人間関係
人間関係

学習意欲
学習意欲

自己有用感
自己有用感

※１保護因子･･･ある問題を引き起こす危険性を減少させる因子。
（東京都教育委員会「児童・生徒を支援するためのガイドブック」平成３０年１２月発行より）

（公社）東京都教職員互助会

フラーリッシュ理論を実践の場にいかす際のイメージ

フラーリッシュ理論とは…

（東京学芸大学　松尾直博教授監修による）

〇英語のフラーリッシュ（Flourish）からきており、「花が開く」ことや「繁栄する」こと、「栄える」ことを意味する言葉。

〇ポジティブ心理学の文脈で「フラーリシングな状態になる（フラーリッシュを実現する）」と言った場合は、一時の幸せではなく、満ち足りた幸せな状態が末長く続くようなイメージで使われ、最適な自己を実現している状態といった意味合いも含まれる。

〇学校の中で「最適な自己を実現している状態」を、こちら側の仕掛けで達成し、持続させていくことで、不登校が生じないための「魅力ある学校づくり」を展開していこうという取組。

〇フラーリッシュになるための要素

「楽しさ」ポジティブな感情を経験する機会
「熱中」熱中・夢中になれることの発見・実践
「絆」　信頼できる人、笑い合える人などの発見
「意義」成長の実感、役立つことの実感
「達成」目標を実現できたことの体験

＋

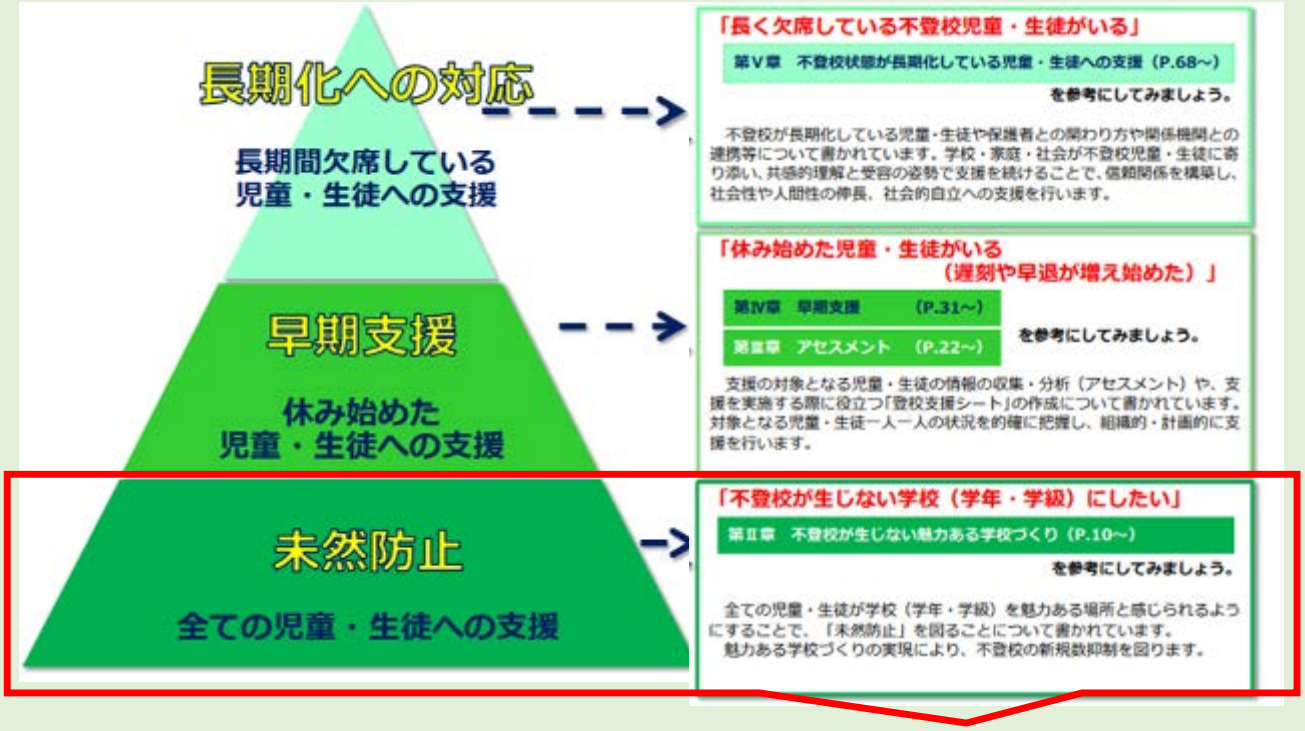
「強み」よさや長所の認識

（公社）東京都教職員互助会

研究する上で重視し、職員全員で共通理解を図った点

①新たに不登校が生じないための「魅力ある学校づくり」を展開するという考え方（東京都教育委員会「児童・生徒を支援するためのガイドブック」P.8～P.9より）

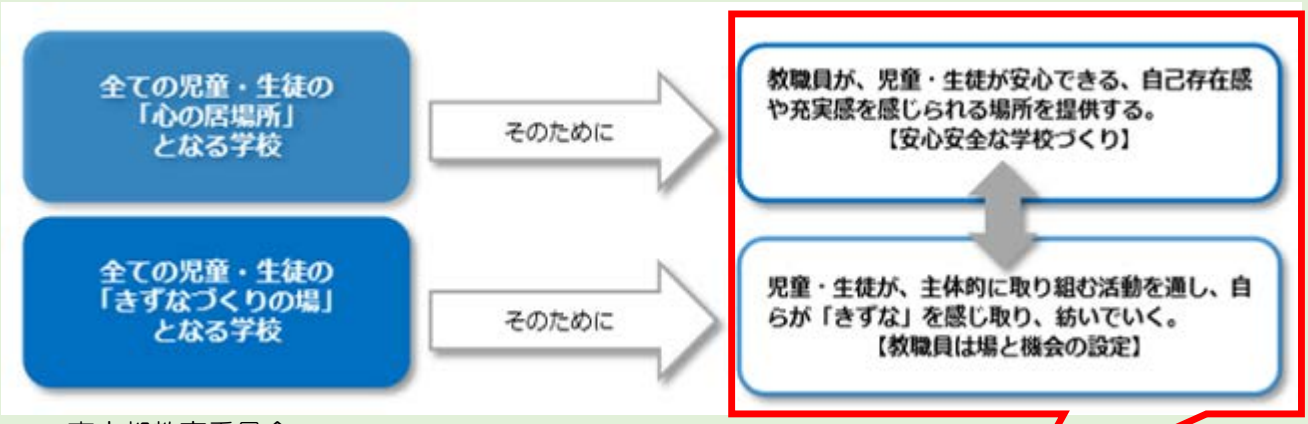
今までは「不登校生徒に対してどのように対応していけばよいか」について検討する機会を多くもってきたが、「新たに不登校が生じないための『魅力ある学校づくり』」という考え方を取り入れた。



今回注目した部分

②新たに不登校が生じないための「魅力ある学校づくり」＝フラーリッシュ理論

「魅力ある学校づくり」には、生徒が「自己存在感」や「充実感」を感じられる場所を提供すること、主体的に取り組む活動を通して「きずな」を感じられる場の設定や機会を設定することが求められる。これはフラーリッシュ理論の「楽しさ」、「熱中」、「絆」、「意義」、「達成」の５要素と一致する。



東京都教育委員会
「児童・生徒を支援するためのガイドブック」P.１１より

「フラーリッシュ理論」と一致

研究する上で重視し、職員全員で共通理解を図った点

③数値化された現状の把握、対策の検討と実践（PDCA）

Plan　：現状の課題に沿って「企画シート」を作成。
Do　：企画シートに沿って、１学期間実践を続ける。
Check　：年２回の「hyper-QU」（今年度は６月、１０月に全学年で実施）、年３回の「フラーリッシュアンケート」（今年度は６月、９月、１２月に全学年で実施）２種類の調査から、現状のフラーリッシュを数値化して把握。
Action　：次の学期に再び同じアンケートを実施し、自らの実践を振り返り、次の実践につなげる。

（本校のフラーリッシュ実践ＰＤＣＡサイクル）

5月				6月				7月				8月				9月			
第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週
	講義					（C）調査	集計		結果報告	分析・方針検討（A/P）				学年共有 方針決定		実践（D）			

10月				11月				12月				1月				2月			
第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週
実践						（C）調査	集計		結果報告	分析・方針検討（A/P）		学年共有 方針決定	実践（D）						（C）調査

3月			
第1週	第2週	第3週	第4週
集計		（A/P）結果報告	

【フラーリッシュアンケート結果の一部】※東京学芸大学　松尾直博教授 集計・分析

４種類の分析結果をうけて、現状を把握した。
（１）フラーリッシュ要素別得点　　（２）「全項目クラス別平均」（図）
（３）全生徒得点別　　（４）個人全回答

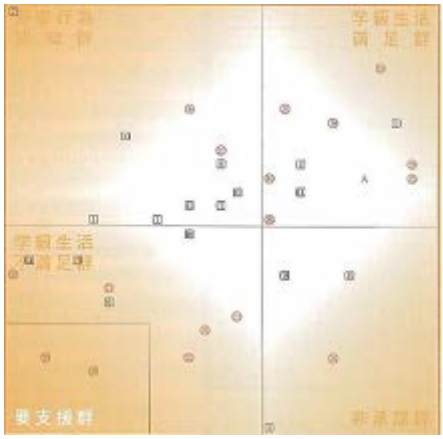
図：全項目クラス別平均

全項目クラス別平均（例）

下位尺度	番号	項目						
楽しさ	①	学校で、楽しいと感じることがあった。	4.70	4.32	4.60	4.72	4.23	4.45
	⑥	学校で、幸せだと感じることがあった。	3.74	4.21	3.90	4.22	3.87	4.03
	⑪	学校で、安心できる、ほっとできると感じることがあった。	4.27	4.00	3.57	4.19	4.00	3.96
	⑯	学校で、誰かに「ありがとう」という気持ちを感じることがあった。	4.79	4.19	4.60	4.66	4.45	4.53
	㉑	学校で、うれしいと感じることがあった。	4.68	3.94	4.38	4.63	4.48	4.35

数値の低い項目や高い項目に注目し、注目した項目を「高める」授業を目指す。

【hyper-QU 結果の一部】



「hyper-QU」では、「学級生活満足群」、「非承認群」、「侵害行為認知群」、「学級生活不満足群」、「要支援群」に分かれ、どの部分に誰が位置するのか、出席番号で示される。左図の場合、学級に「満足」している生徒が多くみられるが、「非承認群」がいることがわかる。

フラーリッシュの「承認」に関する項目（「強み」に多い）と照らし合わせながら、非承認群を減らし、承認に対するフラーリッシュ数値をあげていく「しかけ」を考えていくことになる。

強み認識	①	自分のよさや長所を理解している。	3.81	3.42	3.57	3.78	3.48	3.52
	②	自分のよさや長所を学校で発揮できている。	3.68	3.32	3.20	3.53	3.29	3.30
	③	自分のよさや長所を認めてくれる人が学校にいる。	4.00	3.58	3.73	3.78	3.65	3.63
	④	自分のよさや長所が、学校の中でさらに伸びている。	3.48	3.61	3.23	3.50	3.23	3.30
	⑤	自分のよさや長所について、学校で気づいたことがある。	3.42	3.32	3.20	3.34	3.19	3.23

図書文化社「hyper-QU」より

研究する上で重視し、職員全員で共通理解を図った点

④不登校数を「新規数」、「継続数」、「予備群」で考える

不登校を３段階に分けて考えていく上で、数字で表れている「不登校数」をすべて同じとして見るのではなく、「継続数」と「新規数」（年間３０日以上欠席）及び「予備群」（年間１０日以上３０日未満）に分けて把握。今回は「新規数」、「予備群」をいかに減らしていくかに注目。

（下図：国立教育政策研究所 Leaf.22「不登校の数を『継続数』と『新規数』とで考える」）

不登校に関する二つの取り組み方

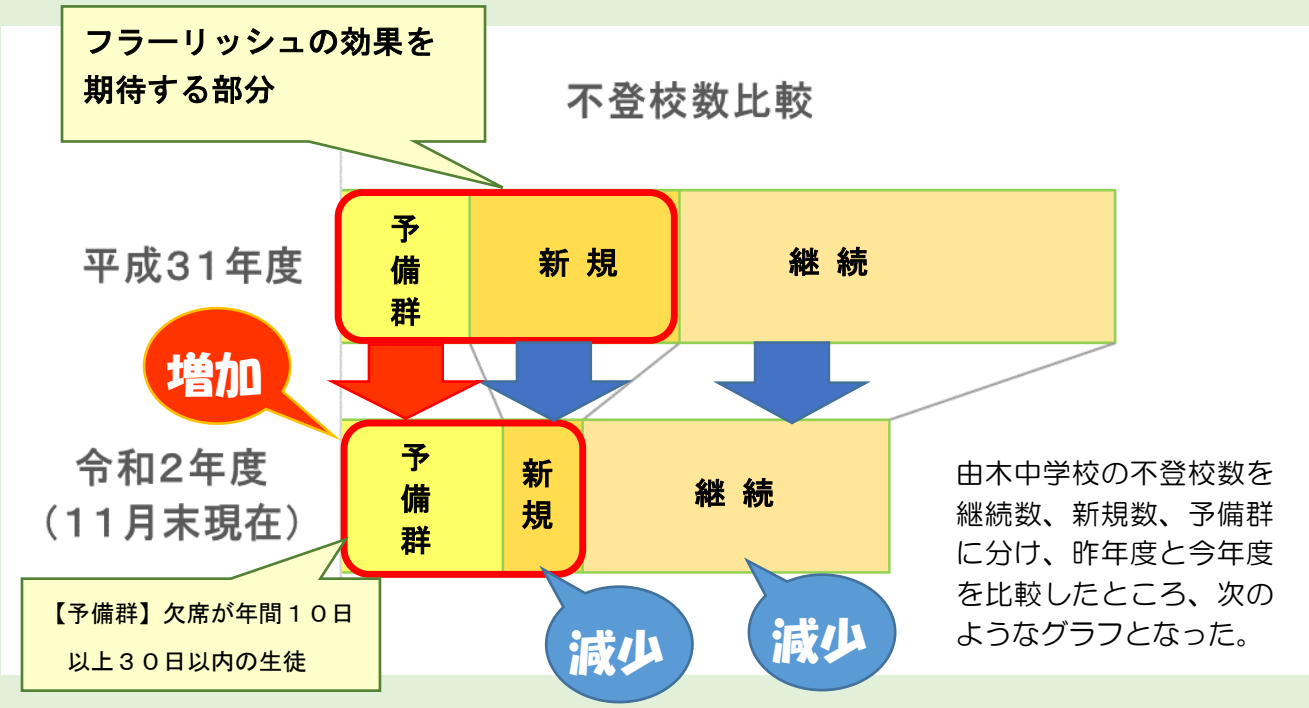
これまで見てきた不登校の数を継続数・新規数に分けて把握する考え方を，具体的な取組に重ねると，次のような二つに整理することができます。

	取組の対象	取組の方向性
継続数に着目した取組	前年度不登校であった児童生徒 年度途中に不登校となった児童生徒	社会的自立を目指す不登校児童生徒への支援
新規数に着目した取組	全ての児童生徒	不登校が生じない魅力ある学校づくり

継続数に着目すると，取組の対象は「前年度不登校であった児童生徒」や「年度途中に不登校となった児童生徒」になります。取組のイメージは，児童生徒の社会的自立を目指した多面的な支援を進めることであり，その結果として不登校児童生徒のうち何人かの不登校状態が翌年度解消されることもあります。

新規数に着目すると，取組の対象は「全ての児童生徒」になります。取組のイメージは，「居場所づくり」や「絆（きずな）づくり」（「生徒指導リーフ Leaf.2」）を通して，全ての児童生徒にとって「不登校にならない，魅力ある学校づくり」を進めることであり，その結果として新規数の抑制に至ることが期待されます。

【継続数と新規数を分析する】令和２年１１月現在



由木中学校の不登校数を継続数、新規数、予備群に分け、昨年度と今年度を比較したところ、次のようなグラフとなった。

昨年度からの取り組みに対し、不登校数が全体的に減少していることが分かる。継続していた不登校数も減少している。新規数が減少したものの、欠席が年間１０日以上３０日以内である予備群の生徒数が増加傾向にあることが分かった。

フラーリッシュ実践例（教科等）

【保健体育】「君はリトルティーチャー　～みんなに教えよう～」

（１）課題の設定→数値の低いところに注目

【意義】	⑭	学校で、誰かのためになることをしていると感じることがあった。	4.06	3.58	3.67	3.97	3.42	3.73
【達成】	⑩	学校で、努力していたことが実った・報われたことがあった。	3.94	3.52	3.47	3.83	3.71	3.75

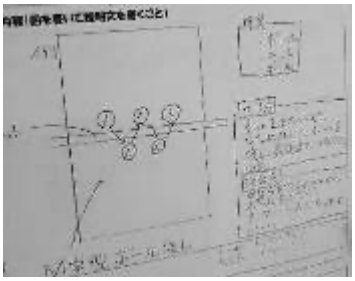
↑「意義⑭」、「達成⑩」の項目数値をあげていきたい。

（２）２つの数値を高めるための活動の企画・実践

【意義⑭】「誰かのためにしている」数値を高めるために→授業でリトルティーチャーを務める。

【達成⑩】「努力していたことが実った」数値を高めるために→計画したことを実践させ、成功体験をさせる。

（３）活動の実際　「バレーボールの授業でリトルティーチャーを務める」



↑どのような練習をしたらバレーボールに楽しく取り組めるのか、生徒自身が考える。【意義】

↑ボールに慣れるための練習方法について説明する【達成】

↑練習の途中に、リトルティーチャーはアドバイスをする。【達成】

フラーリッシュ実践例（学級活動）

【学級活動】「あなたの『よさ』をみつけよう」

（１）課題の設定→数値の低いところに注目

【意義】	⑭	学校で、誰かのためになることをしていると感じることがあった。	3.58	3.66	3.65	3.69	3.77	3.73
【強み】	⑤	自分のよさや長所について、学校で気づいたことがある。	3.30	3.41	3.32	2.94	3.13	3.23

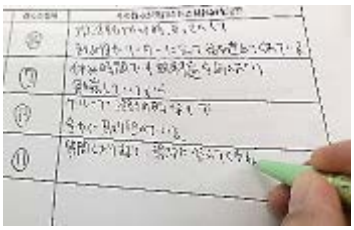
↑学年全体で数値の低い「意義」、フラーリッシュと強く関連する「強み」を高めていきたい。

（２）２つの数値を高めるための活動の企画・実践

【意義⑭】「誰かのためにしている」数値を高めるために→クラスメイトのよさを見付ける。

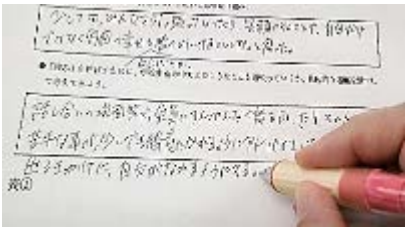
【強み⑤】「自分のよさに学校で気付いた」数値を高めるために
→クラスメイトから指摘されたよさを通して自分のよさに自信をもつ。

（３）活動の実際「自分の強みについて考え、友達との交流を通して、伸ばしたい『強み』をもとう。」



↑自分の強みは何か、班の人の強みは何か、それぞれ考える。【強み】

↑班員のよさについて、それぞれ発表する。【意義】



↑あらためて気付いた自分のよさ、伸ばしたいと思ったよさについてワークシートに記述する。【強み】

成果と課題

【成果】

●フラーリッシュのある学校を目指す実践を通し、数名の生徒の登校が実現した。

●「不登校を生じさせない」という新しい考え方を職員全員で共有できた。

→不登校予備群に対する方策であると同時に、予備群ではない生徒に対しても学校に対する満足感を高める効果があった。

●数値化された現状を把握することで「ねらい」が定まり、教員の声かけや対応に変化がみられた。

→「なんとなくクラスの元気がないかな…」といった「なんとなく」の「勘」ではなく、数値に表われたフラーリッシュの状態を把握することで、何に対する幸福感が低いのか、高いのかをはっきりと把握できるようになった。

●感じさせたい価値（要素）を明確にして教育活動を構想するようになった。

→何のフラーリッシュ要素を高めるのか、ねらいをはっきりもつことにより、ねらいに沿った声かけや教育活動、しかけ、場の設定が実現できるようになった。

【課題】

▶不登校を生じさせないためには保護因子を重くするだけでなく、危険因子を軽くする取組が必要である。→魅力ある学校づくりとともに不登校の危険因子を軽くするための取組が必要である。

▶カリキュラム・マネジメントで効果を高める。→これらの活動（取組）は系統的に行うことでより効果がある。カリキュラム・マネジメントを進め、魅力ある学校づくりを推進する。

▶数値の低いところばかりに注目しない。　→「数値の高いところをさらに伸ばしていく」発想やバランスよくフラーリッシュの要素を授業等の活動に取り入れていく必要がある。

▶教科等の目標を達成するための授業を行う。→フラーリッシュそのものを高めるための授業があってもよいが、教科等に関してはあくまでも教科等で達成すべき目標や評価を大切にしていかなければならない。フラーリッシュを意識して、声かけの内容を工夫していく必要がある。授業内容とフラーリッシュ活動のバランスを考えていく必要がある。